北海道に於けるムラサキサギ とカリガネについて

Records of the Eastern Purple Heron and the
Lesser White-fronted Goose in Hokkaido.

齋 藤 春 雄

Haruo Saito

ムラサキサギ

私は北海道各地を過去 20 年間にわたつて歩いているうちに、アオサギに似た別種のサギを見たという人の話を聞いているが、その色や形からあるいはムラサキサギではないかと想像し、以後注意して来た。ところが今回その成鳥と幼鳥の標本 2 個体を見ることができたので、これについて述べる。

ムラサキサギは、欧亜大陸の中南部、北阿等に分布し、我国の亜種は東シベリヤ、中華民国東南部、印度、馬來等に分布し、韓国には旅鳥として春秋の候に多数渡来、台湾では留鳥として蕃殖する。本邦には迷鳥として極めて稀に飛来するもので、現在まで本州では千葉(1941年)、神奈川(1918年)、静岡(1918年)、広島(1937年)の各県及び八丈島(1923年)等で捕獲された記録がある。

北海道で得られた 2 標本の中の一つは、本年 4 月中旬、札幌市内の学術標本商信田修治郎氏が来訪された時、たまたま昨年より預つている標本の中に変わったサギがあるという話をされたので、早速見せてもらつたところ、ムラサキサギの幼鳥と考えられた。頭上は淡黄褐色で羽冠はなく、頸は淡褐色で黒色の斑があり、背・肩羽・雨覆羽は石板色で各羽には淡赤褐色の羽縁がある。胸は淡赤錆色を帯びた黄色、腰と上尾筒は灰褐色、翼と尾は石板色である。翼長 365 mm、嘴長 125 mm、尾長 130 mm、跗蹠 120 mm、性別は不明である。この標本は 1953 年 9 月 10 日、北海道今市郡仁木村の寒川孝氏が自宅に近い原野で死体を犬がくわえているのをみつけ、これを信田氏の所へ持つて来て剥製標本とするよう依頼したものである。拾得した時は既に相当腐つて居り、剥製するのに苦勞したそうで腹部は不完全なものである。

この標本は現在私が保存している。

他の一つは、明にムラサキサギの成鳥♀と認められる。頭上、後頭は藍紫色で、後頭に同色の細長い羽冠がある。下嘴の基から後頸に藍黒色の線があり、更に両頸側には各々藍黒色の縦線が走っている。背・腰・上尾筒は灰鼠色。肩羽は灰鼠色で、その端は細長く囊のような飾羽となつていて、その先は淡灰色、一部は赤褐色である。腹は藍黒色で、両側はやや赤褐色を呈し、風切羽と尾羽は石板色である。上嘴は暗褐色、下嘴は黄色、脚は暗黒色である。翼長 385mm、嘴長 130mm、尾長 150mm、跗蹠 130mm である。この標本は 1954 年 4 月 25 日、北海道利尻郡鬼脇村（利尻島）の海岸で同村民が拾つたものを私の所に送つて来たものを剥製にしたのである。これは全く完全な標本である。私が保存するのはこの 2 個であるが、その他 1952 年 9 月下旬頃、北海道石狩郡当別村字太美に於て、同地居住の狩猟家石井重登氏がアオサギと思い捕獲したものが剥製となつて保存されており、これは前記の幼鳥と全く同様のものであるそうだから、目下その所在を調べて貰つてゐる。若しこれが発見されムラサキサギであることが確認されれば、現在北海道には私の知る限りでは 3 個の標本があることになる。

尙信田氏の言によれば、北海道静内郡静内町の某氏が、前記第 1 の幼鳥が同氏のもとに来る数日前に、その土地で拾得した前記幼鳥と全く同一のサギを送つて来たが、これは余り古いので棄ててしまつたということである。これらが同種類のものであつたことは、店員全部が認めていることなので、これも一応参考になる。次に私が 1934 年から 1948 年の間に、この鳥らしいものを捕獲又は観察したという話を直接聴いたものの中、比較的信を置けるものを記録してある。それによると、5 月 1 回、7 月 2 回、8 月 1 回、9 月 3 回計 7 回となつている。その当時はアオサギとの誤認ではないかと懸念し、一応記録するに止めておいたが、今に至つてみればこの人達が絶対にアオサギでないと主張していたことにより、これ等はムラサキサギであつたかも知れぬ。

以上の事から、北海道にムラサキサギが相当渡来していると思われるが、更にその発見された個体が幼鳥であることとその時期の点から見て、北海道で蕃殖しているのではないかと考えている。仮りに営巢していても、その数は多くないだろうが、上述の記録及び標本の発見個所から考えると、

全道にわたっているものと思われる。その営巣地が未だ発見されていないのは、積極的に探さなかつたことによるのであろうが、アオサギが相当数繁殖しているのでこれに混同されていたのではあるまいか。両種は同じような営巣状態らしいが、アオサギは地上 8 m ~ 30 m 位の樹枝上に巣をつくり、ムラサキサギは 0.4 m ~ 1.2 m 位の低いところに営巣するともいわれている。然し 1932 年から 1949 年の間に全道にわたつて私の直接調査したアオサギの営巣地 16 個所に於ては、その営巣状況には大きな相違があり、多くは樹上の高所に集団して営巣しているが、中には高さ 4 m 位のものも相当あり、2.9 m という低い例もある。また集団しないで数個或は全く独立して営巣している場合も相当みているので、営巣状況によつて直ちにアオサギ以外のものとして注意をひかなかつたのは、やむを得ないことである。それで今後もムラサキサギの北海道に於ける分布や繁殖の有無などについて特に注意して観察をつづけたいと思つている。

カ リ ガ ネ

小樽市にある花園公園の寓舎に、カリガネが 1 羽飼われている。これは 1952 年の秋北海道勇払郡鵡川町の早川琦太氏より、小樽市の佐々木勇氏を通じて同市にヒシクイ・マガシと共に送られたものである。私は 1953 年 5 月に同公園を訪れた際はじめてこのカリガネのいることを知つた。其の後捕獲当時の事情について知ることが出来たのでこれを略記する。

このカリガネは、1951 年 10 月中旬に鵡川町字汐見の浜の川尻に乾してある魚網にかかつていたのを、同町の水上某なるアイヌが発見し、これを前記の早川氏が引取り約一年間飼育して小樽市に持つて来たのである。早川氏が飼育中に幾分大きくなり、換羽もしたと同氏は言つている。早川氏は現在鵡川町で家畜病院を經營している古い狩猟家であり、鳥獸の飼育には相当興味を持つていて、現在各種の狩猟鳥獸を飼育しているが、この鳥を変つたマガシの幼鳥と思つていたようである。

其の後、1953 年 10 月中旬、鵡川町の川尻にガンの群が降りていたのを猟師に聞いた早川氏が、これに近ずいてみると、その中に数羽の小樽市に送つたものと同様のガンがいた。そこで殺さずに捕獲出来たらと思ひ 8 号霰弾で撃つたところ、運よく 1 羽の翼にあたつてこれを生捕ることが出来た。これを

10日位暗室に入れて飼い、馴れてからキジと一緒に金網に移して飼育していた。それから間もなく同じ場所でこのガンをみて同じ方法で撃つた所、これも大した傷もなく捕獲することが出来たので2羽にして飼育していた。ところが同地は演習地なので、多数の米軍の兵士が往来しているが、その中にアメリカ(シカゴ?)で動物園に勤めていたという人がいた。彼がこれをみて珍鳥であることを知り自分のいた動物園に送りたいから、エゾライチョウと共に是非ゆすり受けたいと懇請するのでこれを渡してしまつた。また早川氏の言によれば、この種のガンは1952年の秋に1羽、1953年春に2羽、1954年3月下旬40羽位のマガンの群の中に3羽見ているそうである。

カリガネは文献によると、従来稀れではあるが各地で捕獲され、北海道に於ては1874年から1943年の間に11例が挙げられている。私は仕事の上から多くの狩猟家に接しているが、度々カリガネらしいガンを捕獲したという人に会っている。然しその人達も私に問われて始めて気がついたほどで、いずれも少し変つたマガンの幼鳥と思つていたのである。当地ではマガンをマツカサ或はマツカワと呼んでいる。それはその胸の黒斑に由来することは明かであるが、カリガネにも胸に黒斑があるのでこの兩種を混同して考えていたのであろうが、嘴の基部の白色部が頭上までであるのはガンの変つたもの位に考えていたようである。またカリガネはマガンの群に混じているのでこれと同一視していたものと思われる。カリガネらしいガンを捕つたということは、いづれも古い話ばかりで、狩猟家が特に剝製にして残したものは相当以前に幼鳥が1羽あり、更に現在私が成鳥1羽の標本を所有しているだけである。

以上の記録や早川氏の言により考えると、北海道を通過して行くマガンの群の中には相当のカリガネが混つているものと想像される。従つてカリガネの渡りや分布を調べるには先づマガンの渡りの状況を知ることが必要である。北海道に於けるガンの渡りについては、改めて発表する機会を得たいが、一応前記のカリガネが捕えられた鵝川附近の状況を略記して御参考に供したい。

鵝川町は苫小牧市より日高の海岸に沿い約26kmで達する太平洋に面した町で、その地域は原野、河川、沼沢地に富み、小禽類の棲息地として知られている。この海岸地帯は冬期ほとんど積雪が無いが、気温は相当低下し沼や

川は凍結する。春季北海道に渡来するガン類の上陸地としてはこの鵒川町附近が最も早くまたその数も多い。例年3月上旬には姿を現わし、本年(昭和

29年)の如きは2月11日にヒシクイの一群を認めている。この地方は以前には春のガンの猟場としては著名であり、私もしばしばガン猟に訪れたところであるが、現在では猟期の関係で春のガン猟は出来なくなつた。この土地に春現われるガンはマガンが多く、70%におよび、ヒシクイは30%程度と思われるが、はじめに飛来するのはヒシクイでこれより10日位おくれてマガンの群が到着する。この頃は時に降雪を見ることがあり、寒さの特に激しい年には早期に現われたガンの群は、海岸に近い原野の上を数回飛び廻つて再び洋上に戻つて行くこともあるという。またここに現われるガンの群は、3月上旬より中旬までの間是一群の数は20羽以内でその数も少ないが、3月中旬以後は1群の数は30~50羽となり次から次へと飛来してくる。これは海岸で2分されその1半は海岸に近い牧草地に降り、他は奥地の田圃に降りる。ここには大体10日位滞在し、更に西北方のオサツ沼を中心とする沼地

に移る。この附近で大集団となつたガンは、更に日本海に近い石狩原野の石狩郡当別町を中心とした地帯に集つて、4月中旬から下旬の間に日本海上に去るのであるが、年によつて、5月10日過ぎまで残るものも少くない。この大集団はおそらく1万羽を越えるものと思われるが、近年殊に増えて来たようである。鵜川町地方に於ける秋の渡りは春にくらべて著しく少く、9月上旬から中旬にいたる間に現われるが、春とは逆にマガンの群が先に渡つて来てその数はヒシクイの方が多いのが普通である。カリガネの観察は北海道のようなガンの集団通過地で行うのが有利であろうが、いろいろの点から考えると、その中でもこの鵜川町の如き上陸地点が最も適当な個所ではないかと思われる。

終りに上記の小稿2編を草するにあたり、資料を供された信田修治郎氏並に早川琦太氏に謝意を表する。なお黒田長禮氏著鳥類原色大図説、内田清之助氏著日本鳥類図説、清棲幸保氏著日本鳥類大図鑑を参考文献とした。

クマゲラの蕃殖について

On the breeding habits of the Great Black Woodpecker

永 田 洋 平

Yohei Nagata

は し が き

クマゲラの分布は本州では秋田県八幡平と北海道全土にわたるが、その蕃殖習性は確認されていない。従つてこれを明かにすることはクマゲラが年々その個体数を減じ、絶滅の憂を濃くしている現在にあつては急を要することと思われる。筆者は1950年夏にクマゲラの巣を発見しその蕃殖の事実を確認する事を得、その概略は既に「野鳥」第17巻第6号に記述したが、更にあらためてその詳細を報告することとした。本稿を草するにあたりいろいろと助言を与えられた北大教授の犬飼哲夫博士、北海道庁林政課の斎藤春雄技師、農林省林業試験場浅川分室の宇田川竜男技官に対し感謝する。

上 北海道でとれたカリガネ。
1954 年佐々木勇氏撮影 (本文 14
頁参照)

Photo by Mr. Sasaki (Lesser
White-fronted Goose, Hok-
kaido, 1954)

左 北海道でとれたムラサキサ
ギの成鳥の剥製標本
(本文 14 頁参照)

Photo by Mr. Saito (Eastern
Purple Heron, Hokkaido, 1954)